

# 越前式石廟に施された彩色装飾について

朽津 信明

●キーワード：笏谷石 (Shakudani stone), 高野山 (Koyasan), 顔料 (pigments), 石造建築 (stone architecture), 壁画 (murals)

## 1. はじめに

諸外国に比べて日本には歴史的な石造建造物がそれ程多くは存在せず、またそれらは一般に屋外で野ざらしにされていることが多いため、それらが彩色されていたという認識が持たれることはあまりない。このため、日本の石造建造物に施された彩色が系統的に調査されて議論されたことは、これまでは殆どなかった。そうした中で、近世初期に造られた、大名関係の廟建築の中には、主たる材料が木ではなく石で造られているものがあり（石廟と呼ばれる）、それらには石で組まれた内部空間が存在する。つまりそれらの石廟においては、古墳壁画や洞窟壁画などと類似する概念で、風雨にあまり晒されることなく今日まで伝えられてきた、石造建造物の仕上げ装飾を観察できる可能性がある。本研究では、石廟建築に施された彩色装飾について記載し、その顔料を分析することから石廟建築の荘厳について考察し、それを石仏などに施された彩色と比較することにより、石廟建築に施された装飾の特徴について議論する。

## 2. 日本の石造建造物と石廟

ヨーロッパが石の文化であるのに対して日本は木の文化と一般に認識されており、日本には歴史的な石造建造物が乏しく、またその多くは明治以降に造られた洋風建築であって、江戸時代以前の伝統的な日本建築の主たる材料が石で構成されている事例は極めて少ない。石造宝塔や石造層塔などにおいて、木造建築を模したような石造建造物の存在を指摘することもできるが、それらは大

概、建物の外観のみを模倣しているに過ぎず、構造も含めて木造建築の木組みを模したものではない。通常の建造物では、外観とともにその内部空間の概念も意識されているが、上記のような石塔では建物の内部空間は全く意識されていないか、あるいは意識されていても極めて限定されたものに過ぎないため、基になる木造塔と同等の概念を持ち合わせているとは見なせない。

これに対して、内部空間が意識された石造構造物としては、古くは古墳の石室のようなものが挙げられるが、これらは逆に外観が建造物としては意識されておらず、通常は墳丘の中に埋設されてしまう。後の時代の仏教文化の中で造られた石室の中には、建造物としての外観が意識されたものも鎌倉時代頃からは現れ始め（図1）、



図1 内部空間が意識された石造構造物  
（重要文化財・文永寺石室五輪塔（1283年築造））

Fig. 1 Stone chamber of Bun'eji Temple (1283 A. D.)



中に仏像を造り出す（または安置する）石龕にも外観が意識された建造物は存在する（川勝：1998）。ただし、これらは一般に小規模で、側壁を組んで天井石を載せただけの極めて単純な構造であり、それを独立した建造物と見るか、あるいは仏像に付随する収蔵ケースのようなイメージで捉えるかの判断は微妙とも言える。南北朝時代頃からは、石殿と呼ばれる石造の神殿建築が見られるようになり、それらの中には石材が構造的に組まれた状態の本格的石造建造物が存在する（図2）（岡山市教育委員会：1982）。こうした石殿は、外観と内部空間との両方が意識された日本の本格的石造建造物の先駆的なものとして捉えられるかも知れない。

一方、死者の霊を祀った建物は廟建築と呼ばれるが、個人の墓塔の覆屋としての建造物を建てるのが近世初期頃から行われ始め、例えば豊臣秀吉が母の病氣平癒祈願のために（母の生存中に）建立した、現在は移築されて横浜市三溪園内にある天瑞寺寿塔覆堂（1592年）は、近世廟建築の先駆的な存在と指摘されている（村上：1990）。通常の廟建築は、石造の墓塔を内部に安置する木造建造物として建てられるが、石を主たる材料として建てられた廟建築も稀に存在し、それらが特に石廟と呼ばれている（川勝：1998）。これは、大名関連の廟建築が各地に建てられるようになる時代背景とともに、上記

のような石殿建築がそれ以前から既に存在していたことから、石材の加工という面においても求められる構造物を組み立てることができる技術的背景が確立されていたことにもよると考えられる。日光東照宮の例を見ても、木造の廟建築は極彩色に荘厳されている場合が殆どであり、こうした観点から石廟における彩色装飾が注目されることになる。

### 3. 日本の石廟—特に越前式石廟について—

日本に現存する石廟建築の中で、現在国指定の文化財となっている物件は以下の通りである。まずは国指定重要文化財建造物である、和歌山県高野町高野山の松平秀康及び同母霊屋（図3）。国指定史跡である、長崎県大村市の大村藩主大村家墓所（図4）。そして同じく国指定史跡である、北海道松前町の松前藩主松前家墓所（図5）。さらに国指定史跡の滋賀県米原市の清滝寺京極家墓所。そして国指定史跡に近年指定された、石川県金沢市の野田山・加賀藩主前田家墓所である。このうち、松平秀康及び同母霊屋は、それぞれが笏谷石（しゃくだにいし）と呼ばれる越前産の凝灰岩（後述）で築かれた石廟建築であり、それぞれ1607年と1604年に築かれたことが銘から確認される（天岸：1958a, b）。大村家墓所については、史跡指定範囲内に歴代藩主や関係者の墓が立ち並ぶが、そのうちの五代藩主（1712年没）と八代から十一代（1882年没）までの藩主の墓計五件が石廟建築である。その他に関係者の墓にも小型の石廟建築が



図2 内部空間が意識された石造構造物  
（重要文化財・守福寺石殿（1338年築造））  
Fig. 2 Stone shrine of Shufukuji Temple (1338 A. D.)



図3 重要文化財・高野山松平秀康及び同母霊屋  
（1607および1604年築造）  
Fig. 3 Stone mausoleums at Koyasan (1607 and 1604 A. D.)





図4 国指定史跡・大村藩主大村家墓所  
Fig. 4 Stone mausoleums of Omura Family

何件か認められるが、それらも含めて石材はいずれも玄武岩とされている（大村市教育委員会：2007）。松前家墓所についても、史跡指定範囲内に歴代藩主や関係者の墓が立ち並ぶが、初代（1608年没）から十二代（1866年没）に至るまでの藩主、そしてその正室などの関連人物たちの墓計二十四件の石廟建築が確認されている（文化庁文化財保護部史跡研究会：1991）。石材は、笏谷石、砂岩、花崗岩の三種類が指摘されているが、このうちの特に笏谷石製の石廟については、被葬者の没年が1641年から1765年までの間のものに限られるとされている。清滝寺については、史跡指定範囲内に京極家歴代当主の墓が立ち並ぶが、このうちの十九代・高次（1609年没）の一件だけが笏谷石製の石廟である（田岡：1968）。（他に、江戸時代中期以降の木造廟も見られる。）前田家墓所については、史跡指定範囲内に歴代藩主や関係者の墓が立ち並ぶが、現存する石廟はこのうちの藩主ではなく藩主の娘など近縁者の墓八件で、いずれも笏谷石製と報告されており、その没年は1603年から1641年に及ぶ（金沢市：2008）。（かつては藩主の石廟も存在したものが、現在に至るまでの間に破壊されたと伝えられる。）

その他に、同時代の石廟の中で主だったものとしては、以下のものが挙げられる。すなわち、京都市本満寺にある松平秀康正室の蓮乗院（1616年没）廟（川勝：1972）、福井県越前市正覚寺にある松平秀康四男吉松（1609年



図5 国指定史跡・松前藩主松前家墓所  
Fig. 5 Stone mausoleum of Matsumae Family

没）廟（藤原：1968）、富山県高岡市瑞龍寺の前田利長（1614年没）廟をはじめとする五件立ち並ぶ石廟群（藤原：1968）、石川県金沢市慈雲寺の富田重政（1625年没）廟をはじめとする三件立ち並ぶ石廟群（金沢市：2008）、同県七尾市長齢寺の前田利家・利長廟（北林：2008）などであり、これらはいずれも笏谷石製の石廟とされる。また愛知県江南市の宝頂山墓地には、生駒利豊（1667年没）及びその室の石廟があり（江南市史編纂委員会：1983）、石材名は報告されていないが、いずれも笏谷石製ではなく花崗岩類で造られていると推定される。この他、京都妙心寺春光院には、外側の廟のみ笏谷石製で、内部に安置された宝篋印塔は出雲産の来待石（凝灰質砂岩）で造られている、堀尾泰晴夫妻（室は1607年没）の石廟もある（松江市教育委員会：2007）。さらに、堀尾家が藩主を努めた時代のある出雲地方には、島根県安来市の親子観音、同県松江市の堀尾民部廟、そして同県雲南市の殿様墓といった石廟が知られており、これらはいずれも来待石製の石廟と報告されている（樋口：2005）。また、大村家墓所のある長崎県下では、他に諫早市の天祐寺諫早家墓所や福江市の大円寺五島家墓所にも石廟が存在することが報告されている（大村市教育委員会：2003）。これら以外にも、高さが1mに満たない程度の小規模な石廟は各地で数多く存在が知られている（水谷：2009）が、それらについては省略する。

以上を概観すると、石廟を構成する石材としては、笏谷石という石材が特に注目されることになる。笏谷石とは、福井県の足羽山付近に産出する、第三紀中新世の糸



生累層の火山砕屑岩類の中で、特徴的な緑色を呈する火山礫凝灰岩のことを指して用いられる用語（福井県：1999）だが、文化財石材を示す用語としては厳密な定義はなく、漠然と「越前産の緑色の凝灰岩類」という程度の意味で用いられる場合が多い。笏谷石は、古くは古墳時代の石棺石材などに用いられているのが確認され（福井市：1990）、また朝倉氏が越前を支配していた戦国時代には夥しい数の石仏・石塔の材料として使われたことが知られる（福井県教育委員会：1975）。笏谷石製の石廟は、高野山松平秀康母の霊屋が1604年に造られた例が確認できる最古とされ、これは松平秀康が初代越前藩主であることとの関連で理解される。その他の上記に挙げた笏谷石製の石廟についても、松平秀康に関連した人物のもの、そして前田家や堀尾家などの越前地方に深い縁のある人物、富田重政などの前田家にゆかりのある人物、さらには若狭武田氏の系譜を引く松前家や小浜城主だった京極高次など、いずれも現在の福井県と何らかの関連のある人物の廟として造られている点が指摘される。なお、越前式石廟という用語は、笏谷石製石廟とほぼ同義で用いられる場合もあるが、本来は様式を示す用語であり、笏谷石製の石廟と共通する様式を持つ石廟であれば、石材が笏谷石でなくても、また所在地が越前地方でなくても、越前式石廟の範疇として認識される（藤原：1968）。このため、松前家墓所に見られる花崗岩製や砂岩製の石廟や、出雲地方に見られる来待石製の石廟についても、様式的に笏谷石製石廟の影響で造られたことが明らかであることから、越前式石廟の範疇に含めて理解される。ただし、大村家墓所における玄武岩製の石廟については、前室を持つなど様式的に笏谷石製石廟との関連が明確ではないため（図4）、今のところ越前式石廟の範疇には含められず、江南市の生駒家石廟についても同様に、内部の墓塔が確認できないことなどから今のところ越前式石廟の直接的影響が確認されないため、当面はその範疇からは外して理解することとする。

## 4. 彩色装飾について

### 4.1. 総論

上記に挙げた各石廟について、一通り現地調査を行い、目視で石廟内、石廟外、そして内部の墓塔について、彩

色装飾の有無を確認した。なお、当然のことながら築造当初から現代に至るまでの間に風化・剥落が進行していると考えられ、以下はあくまでも現状の記載に過ぎない。

まず、石廟の内部側壁に彩色壁画が確認される例は、七尾市長齢寺、金沢市慈雲寺、越前市正覚寺、京都市本満寺で見られ、この他に金沢市前田家墓所では石廟外壁に、そして高野山松平秀康廟では内部の天井及び柱部分にそれぞれ彩色の絵画が確認される。なお、それらの中には、壁面に施された浮彫の表面や、内部に安置された宝篋印塔表面にも彩色が確認される例がある。

一方、松前家墓所では、壁画は確認されないが、石廟内部側壁及び内部に安置された五輪塔に陰刻された文字に、彩色が存在する場合は認められる。

その他の、米原市清滝寺、高岡市瑞龍寺、京都市春光院、そして出雲地方の各例では、いずれも彩色顔料の存在は確認されない。

越前式石廟の範疇とは今のところ見なせないとした、大村家墓所では壁画は認められないが、石廟外壁及び内部の天井や、安置された墓碑に陰刻された文字に彩色が存在する場合は認められる。生駒家石廟では、現在内部を調査することはできず、外部に陰刻された文字内に彩色は確認されない。

### 4.2. 各論

彩色装飾が確認されたものについて、以下に具体的な状況を記載する。

まず、七尾市長齢寺では、前田利家・利長廟内部壁において、緑色により、蓮華花葉の文様が僅かに確認される。

金沢市慈雲寺では、富田重政廟内部壁において、厚さ2mm未満で白色の下地層が確認され、その上に緑色で蓮華花葉などの文様が確認される。その他、富田重政孫娘廟でも、緑色により蓮華花葉の文様が確認される。

越前市正覚寺では、松平秀康四男廟内部壁において、緑色で蓮華花葉の文様がほぼ全面に確認される（図6）。また、内部に安置された宝篋印塔には金色が確認される（図6）。

金沢市前田家墓所では、春桂院廟において、外壁に緑色で蓮華花葉の文様が確認され、また内部に浮彫表現さ





図6 越前市正覚寺・松平秀康四男廟内部  
石廟側壁には緑色による蓮華花葉文が、そして宝篋印塔には金色の塗布が認められる。

Fig. 6 Inside of the stone mausoleum at Shogakuji Temple, Echizen City



図7 高野山・松平秀康廟内部における接写風景  
柱には白、緑、青、赤により文様表現が、そして陰刻文字には金色が認められる。

Fig. 7 Photographing at a close distance inside the stone mausoleum of Hideyasu Matsudaira

れた仏像蓮華座部分にも、緑色彩色が確認される。

京都市本満寺では、蓮乗院廟において、内部壁に蓮華花葉の文様が確認され、また外壁に浮彫された花葉の表

面にも、緑色が確認される。

高野山では、松平秀康廟内部の柱及び天井において、厚さ2mm未満で白色層が確認され、他に緑色、青色、赤色で雲などの文様が確認される（図7）。また、内部側壁に陰刻された文字の部分に、金色が認められる。さらに、内部に安置された宝篋印塔には、全面に金色が確認され、薬研彫りにされた梵字や縁の部分には緑色及び青色が確認される。

その他、松前家墓所や大村家墓所で陰刻された文字に確認される彩色は赤色または金色であり、一箇所に両方が確認される場合には必ず赤色の上に金色が載って存在する。

## 5. 顔料分析

### 5.1. 対象

越前市石廟の中で今回彩色が認められたものについて、なるべく彩色の残存状況が良い部分を対象として顔料分析を行った。対象を表1に示す。

七尾市長齢寺前田利家・利長廟では、石廟内部左側壁に残存する葉を表現したと見られる緑色部分を対象とした。

金沢市慈雲寺では、富田重政廟で石廟内部左側壁に残存する白色下地部分と、その上で葉を表現したと見られる緑色部分を対象とした。また富田重政孫娘廟において、石廟内部左側壁に残存する葉を表現したと見られる緑色部分も対象とした。

越前市正覚寺では、松平秀康四男廟において、石廟内部左側壁に残存する葉を表現したと見られる緑色部分を対象とした。また、内部に安置された宝篋印塔塔身正面に認められる金色部分も対象とした。

金沢市前田家墓所では、春桂院廟において、石廟外部左側壁に残存する葉を表現したと見られる緑色部分を対象とした。

京都市本満寺では、蓮乗院廟において、石廟内部左側壁に残存する葉を表現したと見られる緑色部分を対象とした。

高野山では、松平秀康廟内部奥壁右側の柱部分に残存する白色と、雲を表現したと見られる緑色、青色、赤色部分を対象とした。また、その柱絵の近傍で、側壁の陰



表1 分析対象と結果一覧  
Table 1 The measured objects and the result

| 所在地      | 被葬者     | 箇所     | 色 | 元素 | スペクトル | 解釈     |
|----------|---------|--------|---|----|-------|--------|
| 七尾市長齢寺   | 前田利家・利長 | 内部壁画   | 緑 | Cu | 銅系緑   | 銅系緑色顔料 |
| 金沢市慈雲寺   | 富田重政    | 内部壁画   | 緑 |    | 銅系緑   | 銅系緑色顔料 |
|          |         | 内部壁画下地 | 白 | Ca | 白     | 貝殻胡粉？  |
|          | 富田重政孫娘  | 内部壁画   | 緑 | Cu |       | 銅系緑色顔料 |
| 越前市正覚寺   | 松平秀康四男  | 内部壁画   | 緑 | Cu | 銅系緑   | 銅系緑色顔料 |
|          |         | 宝篋印塔   | 金 | Au | 金     | 金箔？    |
| 金沢市前田家墓所 | 春桂院     | 外部壁画   | 緑 | Cu |       | 銅系緑色顔料 |
| 京都市本満寺   | 蓮乗院     | 内部壁画   | 緑 | Cu | 銅系緑   | 銅系緑色顔料 |
| 高野山      | 松平秀康    | 内部柱絵   | 緑 | Cu | 銅系緑   | 銅系緑色顔料 |
|          |         |        | 青 | Cu | 銅系青   | 群青     |
|          |         |        | 赤 | Hg | 水銀朱   | 水銀朱    |
|          |         |        | 白 | Ca | 白     | 貝殻胡粉？  |
|          |         | 内部壁文字  | 金 | Au | 金     | 金箔？    |
| 松前家墓所    | 松前邦廣    | 内部壁文字  | 赤 | Fe | ベンガラ  | ベンガラ   |
|          | 松前氏廣室   | 宝篋印塔梵字 | 赤 | Fe | ベンガラ  | ベンガラ   |
|          |         |        | 金 | Au | 金     | 金箔？    |

刻文字の中に見られる金色部分も対象とした。

最後に松前家墓所では、6代藩主松前邦廣石廟において、内部右側壁に残存する赤色部分と、3代藩主松前氏廣室石廟内部に安置された五輪塔水輪部分の梵字内に見られる金色と赤色部分を対象とした。

## 5.2. 方法

各対象箇所について、元素分析と可視光反射スペクトル分析とを行い、さらに顕微鏡観察及び接写によって顔料の粒子観察を行うことで、いずれも現地で非破壊・非接触で分析・観察を試みた。

元素分析においては、セイコーイージーアンドジー社の低レベル放射線源を用いた蛍光X線分析装置（朽津：2003a）を用い、100マイクロキュリーのアメリカシウム241を線源として用い、120秒間の測定を行った。色の測定においては、オーシャン옵ティクス社のファイバーマルチチャンネル分光システム（朽津：2003a）を用い、ハロゲンランプを光源として緑色の測定においては380～1000nmの、それ以外の色においては380～780nmの反射率曲線を得た。さらに顕微鏡観察はサンコーのUSBデジタル顕微鏡Dino-Lite（朽津：2009a）により、500倍で構成粒子の大きさ・形状や組織の観察を行った。接写においては、オプトハイテック社のOPT-DGLをコンパクトデジタルカメラの先端に取り付け、ズー

ム機能により粒子の観察を行った（図7）。

## 5.3. 結果

結果を表1に示す。

観察された緑色彩色は、いずれも笏谷石の示す緑色発色とは異なり830nm付近が下に凸の波形を示し（図8）、元素分析で銅が顕著に検出された。顕微鏡下では、いずれも径10μm未満の大きさで均質な、角張った緑色粒子が卓越した。金色部分からは、いずれも元素として金が検出され（図9）、顕微鏡観察により、金色物質は膜状に存在することが確認された。富田重政廟と松平秀康廟で見られた白色は、いずれも元素としてカルシウムが

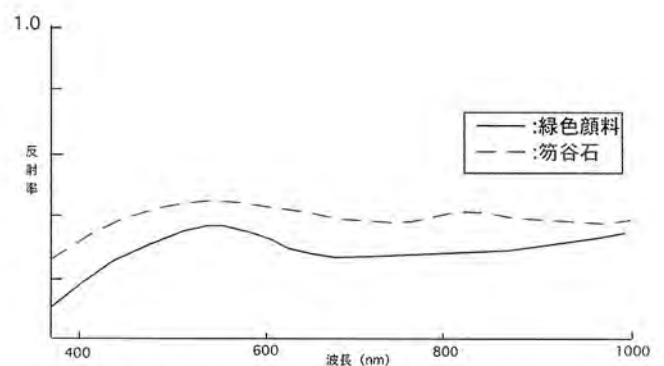


図8 緑色彩色部分と笏谷石の可視光反射スペクトル比較（七尾市長齢寺石廟）

830nm 付近の波形が異なっている。

Fig.8 Visible reflectance spectra of green pigments and the stone constituting mausoleum

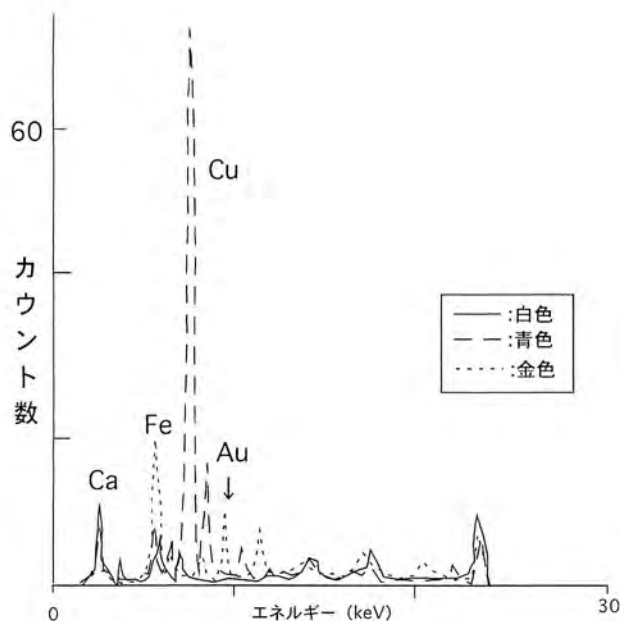


図9 各色の元素分析結果  
金色（正覚寺松平秀康四男廟宝篋印塔表面）では金が、白色（慈雲寺富田重政廟下地）ではカルシウムが、青色（高野山松平秀康廟柱絵）では銅が、それぞれ顕著に検出される。

Fig. 9 The results of chemical analyses of the pigments

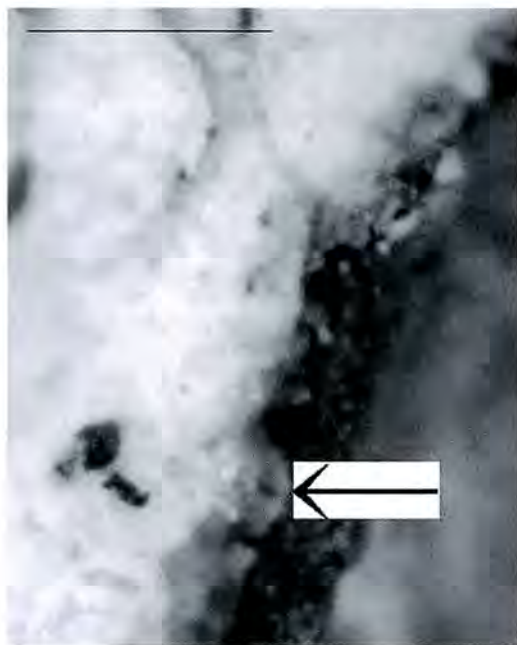


図10 白色部分の顕微鏡写真（慈雲寺富田重政廟下地）（図中の一  
が 200  $\mu$ m）  
長径 20  $\mu$ m 程度の角張った板状粒子が卓越する。

Fig. 10 Microscopic photo of the white pigment  
—means 200  $\mu$ m.

顕著に検出された（図9）。顕微鏡観察及び接写の結果、白色粒子はいずれも長辺 20  $\mu$ m 程度の板状の形状を示した（図10）。松平秀康廟で見られた青色は、430nm

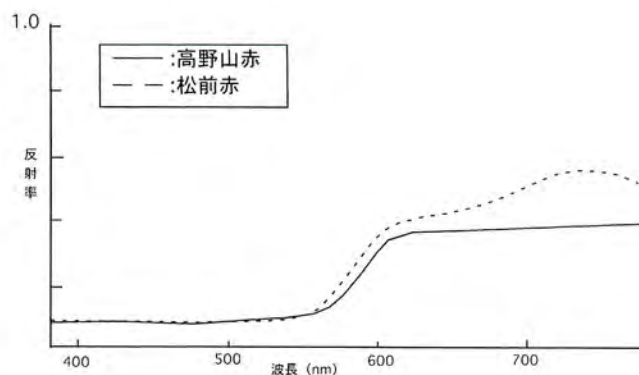


図11 赤色の可視光反射スペクトル比較  
高野山（松平秀康石廟柱絵）の赤と松前（邦廣石廟側壁）の赤とでは、吸収位置や 600nm 以上の波形が異なる。

Fig. 11 Visible reflectance spectra of red pigments

付近にピークを持ち 700nm 付近に吸収を持つサインカーブ状の波形を示し、元素として銅が顕著に検出された（図9）。顕微鏡下では、径 30  $\mu$ m 程度の大きさで均質な、角張った青色粒子が卓越した。松平秀康廟で見られた赤色部分からは、水銀が顕著に検出され、スペクトル波形も水銀朱と類似した（図11）。松前家墓所で見られた赤色部分からは、いずれも鉄が顕著に検出され、スペクトル波形もベンガラと類似した（図11）。

## 6. 考察

### 6.1. 顔料の推定

まず、今回観察された緑色彩色は、いずれも銅系緑色顔料による表現と推定される。その粒子形状は、緑色顔料としての緑青と類似する。次に、金色は、金による表現と考えられ、膜状の性質から金箔である可能性が考えられる。白色は、カルシウム系白色材料と考えられ、粒子の形状からそれが溶液からの沈澱によって得られた炭酸カルシウムとは考えにくく、少なくとも漆喰とは思われない。恐らくは、既に固体として存在していた炭酸カルシウムが砕かれた材料と推測され、その形状から貝殻胡粉である可能性が想起される。青色は、銅系青色顔料である群青による表現と推定される。最後に赤色については、松平秀康廟では水銀朱による表現であるが、松前家墓所では鉄系のベンガラによる表現と推定される。

### 6.2. 石廟の彩色装飾の特徴

日本の石造文化財における緑色表現は、これまで分析



された限りでは、銅系顔料である緑青よりも鉄系顔料である緑土でなされているケースの方が多く報告されており（朽津ほか：2004）、特に岩石の表面に直接緑色表現がなされている装飾古墳の例では、その全てが緑土によると報告されている。石廟における緑色表現は、今回調べた範囲ではいずれも銅系緑色顔料（恐らくは緑青）と考えられ、明らかにこうした傾向とは異なっていると言える。また、カルシウム系白色材料としては、高松塚古墳（江本：1993）やその他の終末期古墳（朽津：2005, 2006）、あるいは鎌倉のやぐら（朽津：2003b）のように漆喰が塗布されている石造文化財の例は数多く報告されているが、今回観察された粒子形状は漆喰とは異なり貝殻胡粉である可能性が想起され、これもこれまで報告されている石造文化財における使用材料の傾向とは異なっている。さらに、松平秀康廟における青色表現としての群青や赤色表現としての水銀朱の使用も、装飾古墳（朽津：2009b）や歴史的な石仏（朽津・山田：2000）などではこれまで報告がない顔料の使用例である。

その理由としては、一つには時代的な背景が考えられ、日本における貝殻胡粉の使用は、通常の板絵の場合には室町時代頃から一般的になると言われている（山崎：1987）。これまでに彩色顔料について報告されている石造文化財は、多くのものが南北朝時代以前のものであり、近世の文化財である石廟に施される彩色装飾とは、時代背景が異なっている。それでも、例えば平安時代後半とされる臼杵磨崖仏（朽津：2003a）や、鎌倉時代の元箱根磨崖仏（朽津：2003b）でも緑色表現は緑土、赤色表現はベンガラに限られ、明確な青色表現は確認されていないのに対し、同時代の板絵や塑像などでは、緑青、水銀朱、群青などの使用が珍しくなく報告されている（山崎：1987, 朽津：2007）。つまり、使用顔料の特徴は単純に時代背景だけの問題ではなく、例えば石工と、木彫仏師あるいは絵師といった職人集団の違いによって、用いられる顔料が異なっていた可能性も検討される必要がある。その意味では、今回石廟の彩色装飾で使用が確認された顔料のバリエーション、中でも松平秀康廟で想定

された貝殻胡粉下地の上に緑青、群青、水銀朱で文様表現を行う技法は、明らかに中世以前の石工の手による作品に施される装飾の概念とは異なり、板絵で一般的に用いられる技法に近いと言える。だとすれば、石廟の築造にはもちろん高度な石工技術が必要とされることは言うまでもないが、その仕上げ段階には、絵師のような別の専門集団が関与していた可能性についても検討される必要があるだろう。

なお、松前家墓所で認められたベンガラと見られる赤色は、産状から文字部分に金箔を貼るために使用されたものと推定され、松平秀康廟で絵画表現に見られる赤色表現とは用途が異なり、これが異なる材料であることはむしろ妥当と判断される。こうした材料使用は通常の石塔でもごく一般的に認められることが報告されており（朽津：2003b）、石工技術の一環として捉えられるべきかも知れない。

## 7. まとめ

高野山松平秀康及び同母霊屋をはじめとする、各地の越前式石廟に施された彩色装飾について調査・分析を行ったところ、多くのもので銅系緑色顔料による蓮華花葉文が描かれているのが観察された。また、貝殻胡粉と見られるカルシウム系白色下地の上に、群青や水銀朱などの顔料で壁画が描かれたと見られるものも認められた。こうした荘厳は、中世以前の石造文化財で見られる装飾材料とは明らかに異なり、板絵で認められる材料と共通点が多い。従って、その仕上げにおいては石工ばかりでなく絵師も関与した可能性も検討される余地があるだろう。

## 謝 辞

本研究における現地調査は、それぞれの調査対象の所有者、管理者、及び担当行政のご理解・ご協力により行われた。また、調査に当たっては、七尾市教育委員会の北林雅康氏、東京文化財研究所の森井順之氏、和歌山県文化財センター鳴海祥博氏に補佐していただいた。以上を記して御礼申し上げます。



## 引用文献

- 天岸正男 1958a「紀伊高野山越前家石廟とその墓碑」『密教文化』40, pp.9-24.
- 天岸正男 1958b「紀伊高野山越前家石廟とその墓碑（続）」『密教文化』41/42, pp.77-98
- 江本義理 1993『文化財をまもる』アグネ技術センター
- 大村市教育委員会 2003『大村藩主大村家墓所調査報告』
- 大村市教育委員会 2007『国指定史跡大村藩主大村家墓所保存管理計画書』
- 岡山市教育委員会 1982『岡山市の有形文化財資料集成』
- 金沢市 2008『野田山・加賀藩主前田家墓所調査報告書』
- 川勝政太郎 1972「笏谷石文化について」『史迹と美術』421, pp.2-17
- 川勝政太郎 1998『日本石造美術辞典』東京堂出版
- 北林雅康 2008「長齡寺前田利家・利長石廟―能登半島地震による修復調査の報告―」『能登の文化財』42, pp.7-27
- 朽津信明 2003a「臼杵磨崖仏で観察される彩色表現について（2）―屋外彩色文化財の現地分析法の展開―」『保存科学』42, pp.19-27
- 朽津信明 2003b「鎌倉のやぐらで観察される装飾材料について」『保存科学』42, pp.29-36
- 朽津信明 2005「広島県福山市周辺の漆喰使用古墳について」『考古学と自然科学』51, pp.11-18
- 朽津信明 2006「群馬県前橋市周辺の漆喰使用古墳について」『考古学と自然科学』53, pp. 1-10
- 朽津信明 2007「顔料が語る中世筑波の文化交流」茨城県立歴史博物館編『中世東国の内海世界』pp.253-264, 高志書院
- 朽津信明 2009a「いわゆる「宋風獅子」の岩質について」『考古学と自然科学』58, pp.1-11
- 朽津信明 2009b「装飾古墳の顔料」『月刊文化財』547, pp.38-41
- 朽津信明・中牟田義博・三木 孝 2004「日本における緑色顔料「緑土」の使用について」『考古学と自然科学』46, pp.55-66
- 朽津信明・山田拓伸 2000「大分県下の石仏の彩色について」『保存科学』39, pp.33-42
- 江南市史編纂委員会 1983『江南市史 資料編四 文化編』
- 田岡香逸 1968『近江の石造美術1』民族文化研究会
- 樋口英行 2005「来待石製石龕の成立と展開―江戸時代前半を中心に―」『来待ストーン』6, pp.5-16
- 福井県 1999『福井県のすぐれた自然（動物編、植物編、地形地質編）』
- 福井県教育委員会 1975『一乗谷石造遺物調査報告書1』
- 福井市 1990『福井市史 資料編1』
- 藤原良志 1968「越前式石廟の展開ならびに形式の源流について（上）」『史迹と美術』382, pp.57-67
- 文化庁文化財保護部史跡研究会 1991『図説 日本の史跡 第8巻』同朋社
- 松江市教育委員会 2007『松江市歴史叢書1』
- 水谷 類 2009『廟墓ラントウと現世浄土の思想』雄山閣
- 村上汎一編 1990「霊廟建築」『日本の美術』295
- 山崎一雄 1987『古文化財の科学』思文閣出版

（2009年7月29日受付，2010年3月25日受理）



# Color Decoration on the Echizen—style Stone Mausoleums

---

Nobuaki KUCHITSU

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo, 13-43 Ueno Park, Taito—Ku, Tokyo  
110—8713, Japan

---

Echizen—style stone mausoleums are regarded as incipient stone construction in Japan built even before the Western—style stone architectures after the Meiji Restoration. In this study, Echizen—style stone mausoleums were investigated and the color decoration on them was analyzed. They were built mainly in 17 century and are dominantly observed in Hokuriku Area, along Japan Sea, but widely distributed from Hokkaido to Koyasan. Lotus flowers and leaves were painted by copper green pigment on the walls of not a few stone mausoleums. Moreover, copper blue pigment and mercury red pigment are also supposed to be used on shell white pigment basement in some mausoleum. Those pigments have hardly been reported on stone cultural property but commonly on paintings on a board. Therefore, Echizen—style mausoleums may be given the final touches by professional painters after constructed by professional stonemasons.